

出張報告

「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける近代仏教の諸相」

近年、近代仏教研究が盛んに行われているが、その展開の一つの方向性は「越境」である。それは対象が「越境」しているのと同時に研究者の「越境」でもあり、以下に概要を記す国際カンファレンスも、こうした「越境」のあり方をよく示している。

2013年10月4日から5日にかけて、デューク大学（米国ノースカロライナ州）にて国際カンファレンス「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける近代仏教の諸相」が開催され、一報告者として参加する機会を得たので以下に概要を報告する（なお、より詳細な報告が『近代仏教』21号、2014年8月、に掲載されている）。

同カンファレンスはデューク大学のリチャード・ジャフィとキム・ファンズ、また高麗大学校のチョ・ソンテクとアメリカン大学のパク・ジンを共同企画者とし、デューク大学と高麗大学校、そして関連する諸機関の支援によって開催された。カンファレンスの趣旨として、一国史的な枠組みを超えたトランスナショナルな視点において近代東アジア仏教を捉え直すことが述べられていたが、その延長において、対象とする事例をローカル／ナショナル／トランスナショナルといった多様な文脈の一点に回収するのではなく、その重層性において捉えるようとする姿勢も強調されていた。こうした問題意識に基づいてアメリカ・カナダ・ドイツ・アイルランド・日本から登壇者が集められ、全14本の発表からなる4つのパネルと基調講演、そして全体討議が行われた。

4日午前に行われた第1パネルには4本の

発表があり、バーバラ・アンブロス（Barbara Ambros、ノースカロライナ大学チャペルヒル校）がディスカッサントを務めた：

- ・ジャスティン・リッツィンガー（Justin Ritzinger、マイアミ大学）「失われた土地：中国のセイロン留学僧が描いたテクスト、表象、そしてユートピア」
- ・リチャード・ジャフィ（Richard Jaffe、デューク大学）「河口慧海、グローバル化、そして日本における在家仏教の振興」
- ・ブルックス・ジェサップ（Brooks Jessup、ベルリン自由大学）「「誰入地獄？」：戦時日本占領下（1937-1945）におけるエリート中国仏教者」
- ・奥山直司（高野山大学）「明治「インド留学生」：植民地セイロンにおける釈興然と釈宗演の僧院生活」

昼食を挟んで午後に行われた第2パネルには4本の発表があり、レヴィ・マクローリン（Levi McLaughlin、ノースカロライナ州立大学）がディスカッサントを務めた：

- ・フランチェスカ・タロッコ（Francesca Tarocco、ニューヨーク大学）「ダルマのフレーム：写真と中国仏教を見る」
- ・ジャスティン・マクダニエル（Justin McDaniel、ペンシルヴァニア大学）「華人美術収集家における東南アジアの仏教 Buddhism in Southeast Asia in the Eyes of Chinese Art Collectors」
- ・キム・ファンズ（Hwansoo Kim、デューク大学）「高麗大藏経の解釈をめぐる闘争：一九一〇年から一九四五年にかけて

のコロニアリズムの文脈において」

- ・エイミー・ホルムズ＝タチャングダルパ (Amy Holmes-Tagchungdarpa、アラバマ大学)

続いて行われた第3パネルには3本の発表があり、ピアース・サルゲロ (Pierce Salguero、ペンシルベニア州立大学) がディスカッサントを務めた：

- ・パク・ジン (Jin Park、アメリカン大学) 「近代なる負荷：白性郁と井上円了における仏教哲学の形成」
- ・チャールズ・ジョーンズ (Charles Jones、アメリカ・カトリック大学) 「日本統治期台湾 (一八九五～一九四五) における中国仏教戒壇の設立」
- ・吉永進一 (舞鶴高専) 「日本の英字仏教雑誌：*Bijou of Asia* から *Young East* まで」

翌5日午前に行われた第4パネルには3本の発表があり、ローレン・レヴ (Lauren Leve、ノースカロライナ大学チャペルヒル校) がディスカッサントを務めた：

- ・星野靖二 (国学院大学) 「都合の良い／悪い他者：日本の近代仏教におけるアジア像」
- ・ホ・ナムリン (Namlin Hur、ブリティッシュ・コロンビア大学) 「朝鮮仏教と明治日本：一八七〇年代から八〇年代にかけての仏教の変容を準備したもの」
- ・マーク・ネイサン (Mark Nathan、ニューヨーク州立大学バッファロー校) 「仏教の宣教とダルマの伝達：近代朝鮮と東アジアの仏教におけるパラダイムとしての布教 (Propagation)」

その後、ブライアン・ボッキング (Brian Bocking、ユニヴァーシティ・カレッジ・コーク) が「鏡像の中の鏡？：植民統治下アイルランドからのアジア仏教者 (一八六三～

一九一三)」という題の基調講演を行い、その後インケン・プロール (Inken Prohl、ハイデルベルク大学) のコメントを受けてラウンドテーブル形式の全員討議が行われた。

全体の傾向として、インケンが指摘したように教義・思想的な問題を主要な論点とした発表がほとんど無かった。これは逆に仏教を「媒介」として捉え、より広い視野で議論を「越境」的に展開しようとしているということでもあろう。

議論に際しては様々な論点が提出された。例えば近代国家によって設定された国境はトランスナショナルという視野からは大きな意味を持つが、それが前近代における仏教徒の移動・交流とどのように連続しているのか、あるいは近代において仏教が多言語において「越境」的に語り直されていく過程と同時に、例えば文献学のような形で共通の仏教の起源へと遡っていかうとする動きがあったことをどう捉えるのかといったことが指摘され、議論された。

また後者の言語・翻訳の問題と関係して、近代仏教においては英語が多様な仏教のあり方、あるいは仏教徒達——そして研究者達——のコミュニケーションを成立させる役割を果たしていたことが指摘され、これは前近代における相互交流とは明らかに異なっている特徴であることが確認された。

二日間に渡るカンファレンスは、文字通り朝から晩まで議論づくしの濃密なものであった。なお、このカンファレンスは2012年にアイルランドで行われた国際カンファレンスとテーマ的に連続するものであり、2014年12月には京都で「複数の植民地主義と複数の近代性」という題で次のカンファレンスが予定されている。近代仏教研究の更なる展開が期待される。

(星野靖二)